教えたくなる授業づくり
―教師の意欲回復のために―

福岡教育大学
河野　智文

一　はじめに

――教室へ向かう足取りは軽やかか――

すべての児童生徒の意欲を等しく喚起する学習内容や方法は存在しない。しかし、だからといってあきらめるわけにはいかない。教師は最大にして最善の成果を求めて、来る日も来る日も工夫を重ねる。もちろんそれらが常にうまくいくはずはなく、時として深い徒労感に襲われる。児童生徒の意欲を喚起する役割を担う教師自身の意欲が、喪失の危機にある。教室に向かう廊下で「今から授業ができる」と、授業を心待ちにする思いのうちに、自分を置くことができているだろうか。

教科指導において教師を襲う徒労感の源は、「できない」ことにあるのではなく「できるはずのことをしない」ままに教壇に立たねばならないやるせなさにある、と私は思う。もう少し時間があれば、あんなことやこんなことも授業に取り入れ、児童生徒の目を輝かせることができるはずなのに、という思いである。これまでの仕事は減らず、新しい仕事が次々に降ってくる。時間は有限。となれば、いちど経験した仕事のための準備時間は後回しにされる。「昔教えたことのある教材だから」という理由で、教材研究のための時間は削られる。教室にいるのは、昔の児童生徒ではないのに。「したいこと」が「せねばならぬこと」に押しつぶされていく。そこに、ストレスの源があるように思う。

二　「もうひと手間」を授業づくりに

しかし、そうであっても、今少し、授業づくりに時間を割いてみてはいただけないだろうか。

教材研究の面では、まず、教材をゆっくりと丁寧に音読してみること。よく準備された範読だけでも、じゅうぶん彼らを引きつけることができる。

そして、教材を書き写してみること。時間がなければ部分的な視写でも良い。そして気付いたことを次々に書きこんでいく。不明な点は調べる。紹介したい豆知識が次々に見つかる。こうした作業は、手間暇はかかるが、やはり手書きが良い。

今までは、その場の即興的なやりとりからのひらめきに頼っていた発問や板書を、予め書き出してみて、そのつながりや構成を検討する時間を持つことも試してみてほしい。何かひと手間、授業前に加えてみていただきたいと願う。

三　教師の相互交流

教師相互のつながりの回復にも期待したい。脇目もふらずその日の仕事に没頭し、気がついたら帰宅の時刻、挨拶もそこそこに学校を飛び出す、という姿が実情だろう。六日制への郷愁を聞くとき、最も多いのが土曜の午後の時間を取り戻したい、という思いだ。目的、評価、効率とは無縁の時間だったけれども。

授業について、もっと同僚と語り合う時間をつくりたい。私が参観させていただく研究

授業の中には、明らかに「はずれ」のくじを引かされた人がしぶしぶ務めている、というものもある。しかし、きっかけはそうであったとしても「して良かった」と思えるのは、授業に至るまでの過程で周囲の教員との協力や議論が成立していることがうかがわれ（その意味で「丸投げ」は言語道断である）、よそ行きの「協議会」のあと、授業者の先生を他の同僚が囲む雑談の輪が自然に形成されるからである。「こんなことで悩んでいるのは私だけではないか」という懸念は、職員室という同じ空間の中にいる同僚の間でも発生している。

四　願いと仮説を持って教室へ

実際のところ、教師の多忙化、とくに時間の不足についての提案を、この小稿は持ち合わせていない。そのことを恥じつつ述べさせていただければ、ひとつで良いから「伝えたいこと」を持つこと、児童生徒の反応を通して確かめたいことを「仮説」として携えて教室に向かうことである。

前者は指導目標や評価規準にできるかもしれないし、そうならなくても、教師自身の思いや願いのようなものであって良いと私は考える。大学生が記述する「印象に残った国語の授業」の中に、「先生が最初から最後まで話してくれた授業」が必ず一定数含まれることが、このことの意味を語っている。彼らは、授業にかける教師の思いを受けとめ、教師の持つ専門性に圧倒されたのである。まずは教師自身が、教える内容に深い興味を持ち、「これを知らずにすませるとは、なんともったいない」と、児童生徒に伝えてほしいと思う。学ぶことはおもしろく、やりがいのあることだ。決して、勉強は苦しくつまらないけれども頑張ろう、などとおっしゃらないでいただきたい。

後者は、教育実習で私を鍛えてくださった指導教官の教えである。このことを確かめたい、私の工夫したこの方法を、児童生徒はどう受けとめてくれるだろうか。そう思うだけで、授業が楽しみになるし、一回ごとの実践が意味あるものとして自分を成長させてくれる、そう教えていただいた。研究授業の指導案にも、本時で検証したいこと、授業者が見てほしいところ、訴えたいことがもっと端的に記述されるようになれば、と思う。

五　おわりに

むろん、このような構えには問題もある。「教え」に偏り、授業展開が強引にならないか、教えたいことが増えすぎて、詰め込みになってしまわないか懸念される。

そこで、教えたいことを「教え」の文脈でいちど並べてみたうえで、距離を置き視点を変えて眺め、組み替えたり精選し（捨て）たりする勇気が必要になるのだが、本稿ではそこに至るまでの、まずは授業者自身の内発的な意欲形成への期待を述べた。

授業準備にかけた熱意は必ず伝わる。授業に「不思議の負け」はないのだ。

かわの　ともふみ　福岡教育大学助教授。国語単元学習の歴史的研究が主要課題。国語教育史における実践の重みを常に痛感している。